
バカとテストと美晴の兄と。

ラドゥ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと美晴の兄と。

【Nコード】

N8222Z

【作者名】

ラドゥ

【あらすじ】

この話は、個性が豊かすぎる家族を持つ主人公、「清水美樹雄」が送る学園物語である。ただ…
それだけ……。

どうも。最近就活を始めたラドゥです。久しぶりにバカテスを読んでいたら、我慢できずにいつの間にか手が動いてた事実。

…バカテス。恐ろしい子っ！！

まあ、そんなわけで。ラドウ渾身（笑）の三作目。どっぞ。

……あ、更新はあまり期待しないでね

ブローグ『俺の家族はこんな家族』（改）（前書き）

バカテスを読んでたら、いつの間にか手が動いていました。

…おもしろいですよねえ。バカテス。ギャグ物のラノベなら？1だと自分は思っています。異論は認める（キリッ！

…まあ、就活も始まったんであまり更新できませんが。

それではござ

プロローグ『俺の家族はこんな家族』（改）

ここはとある住宅街のとある部屋。

カーテンからは日の光が漏れ、暗い部屋に光をさしこむ。

チュン チュン チュン チュン

雀の鳴き声が、朝の到来を知らせる。

しかしこの部屋の主である、おそらくは十六、七くらいの年齢であろう少年は、

「ZZZZ……。」

いまだに自分のベッドで惰眠を貪っていた。

しかし、それは別段不思議なことではない。朝といっても今の時間は午前5時。少年くらいの年齢なら起きているほうが珍しいのだ。

青年の部屋には大量の本が積み重なっており、この少年がかなりの読書家だということがうかがえる。

そんな少年の部屋に、

ギイイイイ……

何者かが侵入してきた。

「お兄さま。朝ですわよ……。」

ドアをゆっくり開けて入ってきたのは縦ロールをツインテールにしている小柄な少女。どうやらこの少年の妹らしい。

言動から少年を起こしに来たように思えるが、なぜ声を小さくする必要があるのでろうか。

「ふふふ、お兄様はまだ寝ているようですね。」

そついうと少女はゆっくりとベッドに近づくと、少年の顔を覗き込む。

「……グへへ。お兄様の寝顔はやっぱり可愛いですわねえ。」

どうやら彼女の目的は、少年の寝顔を見ることにあつたようだ。

よほど兄のことが大好きなのだろう。だらしなく頬を緩めてる。

というか、仮にも女の子がグへへって……。

「はあ、やっぱり兄の寝顔を見ることは妹の特権ですわね。本当ならもう起こしたほうがいいのじゃないけど。……せっかくなので、もう少し見てみましょう。」

ジーーーーー

「……………」

ジーーーーー

「……………」

「……………」

「…………おい、まてコラ。」

部屋に突然聴こえる男性の声。

現在この部屋には寝ている少年と、その寝ている少年にめけて目を瞑って唇を差し出している妹しかいない。

そして聞こえたのは男性の声なわけで、

「あら、起きたんですのお兄様。おはようございますお兄様。」

少女は瞬時に何も無かったように取り繕う。

「ん。おはようさん美春。ところでお前さん。今なにをしようとしたんだい？」

「あら。今日は入学式のせいで朝がごたつきそうだから、余裕を持って早めに起こしてくれといったのは、お兄様ではないですか。」

「……………そうだったか？」

嘘である。

「ええ。」

「そうか、それはすまなかった。おかげで助かったよ。」

そういつて少年はほほ笑むと、美春という少女の頭の上に手を乗せ、優しく撫でる。

美春はそれに気持ちよさそうに目を細める。

「い、いえ。妹として当然の義務ですわ。」

「ははは、そうかそうか。————…で、本当は？」

「寝ている隙についてお兄様の唇を奪おうとしました。（キリ）」

「————…ほっ?」

ガシッ（少年が美春の頭を掴む音）

ググググ（少年が手に力を込める音）

ミシミシミシ（美春の頭蓋が悲鳴を上げる音）

「ミギヤアアア!?!」

「そういうことはするなといったよなああ!?!」

「ちよっ、お兄様、痛い痛い、いたたたた。ごごご、ごめんなさ

————…い!?!」

早朝の住宅街に、少女の音が響き渡った……………。

プロローグ『俺の家族はこんな家族』

「うづう……………。まだ頭が痛みますわね。」

「自業自得だ。朝っぱらから変なことをしようとしたお前が悪い。」

ん？おお、…おはよう。画面の向こうの皆。

俺がだれかって？

俺の名前は清水美樹雄しみず みきお

今年で高校一年生になる、本を読むのが好きなただの一般人だ。

そして今俺の隣で頭を押さえてるのは清水美春しみず みはる。

双子の俺の妹だ。それにしては似てないって？まあ、双子といっても二卵性だからしょうがないだろ。

この美春には、少し困ったところがあつてな。

「何をおっしゃいます、お兄様。兄の唇を奪うのは妹の大切な権利です…！」

ゴチンッ

「~~~~ツ!？」

「んなわけねえだろ。ぶん殴るぞ?」

「も、もう殴ってますわ…。」

そう、この美春。少し、…いや、かなりのブラコンで、気を抜いたら俺に迫ってくるから困る。今朝のなんかまだましなほうで、ときどき入浴中に乱入してきたり、下着姿で俺のベッドの中に潜りこんできたりするから困る。

(なんで、こんな風に育っちゃったんだかねえ…。)

昔はもうちょい普通の子だと思っただが。

「あら、今日は2人とも早いわね?」

おっと、この声は。

「おはよう、母さん」

「おはようございます、お母さん。」

「はい、おはよう2人とも。」

そういつて、台所からこちらを覗くのは、清水美智子^{しみず みちこ}。俺と美春の母親である。

ショートカットの似合う美人だが、一見20代に見えるが、確か今年で、

スパッーン！

「なにか変なこと考えたかしら。」

「ははは んなわけないじゃないですかあ。だから包丁を投げるのはやめてください……。というか次の包丁を構えないでください。」

これから母さんの年齢については考えないようにしよう……。

「手伝おうか、母さん？」

「私も手伝いますわ。」

「あら、じゃあお願いしようかしら？」

そういつて俺と美春は母さんを手伝うために台所に入って行った。

しばらくすると、無事に朝ごはんが出来上がった。

トーストにベーコンエッグにサラダに、母さん特製のコーンスープという洋風の朝食で、ベーコンの香ばしい匂いが食欲をそそる。

「そついえば父さんはどうしたの？」

俺は姿の見えない父の所在を母さんに問う。

「ああ、お父さんなら今はお店のほうにいるはずよ。たぶんもつすぐ。」

その時、動物の大移動のような音が近づいてきた。

ドドドドドドドドドド……

ドツバ　ン！

「グッモoooooooooooooooツニング、美晴に美樹雄！我が愛しの子供たちよoooooooooooo！！！」

ドアをもものすごい勢いで開いて現れたのは、異常にテンションの高い中年男性。

これが俺たちの父親である清水孝明しみず たかあき。……まあ、今の言葉でわかるだろうがこの人かなりの親ばかなんだ。特に美春のことを病的なまでに溺愛している。……まあ、スキンシップが激しすぎて美春には嫌がられたりするんだが。

とりあえず、

「父さんうるさい。」

「うるさいわよあなた。」

「静かにしなさい、豚野郎。」

「皆、冷たすぎないっ！？特に美春。僕一応君の父親だよ！？」

「お兄様以外の男性なんて知ったことではありませんわ。」

美春晴がそういうと、父さんが人を殺せそうなもの凄い形相で俺のことを睨んでくる。…まあ、父さんは俺のことも大事にしてくれるけど、優先順位は美晴のほうが高いからなあ…。

「おのれ美樹雄…。僕の娘を誑かしたなあ…。」

「んなわけないだろ。とりあえず、……後ろ向いたほうがいいんじゃない？」

「…はっ！」

俺の忠告を聞いてやっと自分の後ろにいる人物の気配を感じたんだろつ。おそるおそるふりかえる。

「……………」

「……………」

そこには母さんがもの凄いオーラをだしながら、無言で立っていた。

「ミ、ミチコサン、イッタイドシタンデスカ…？」

「……………あなた。」

「は、はいっ！…！」

「美春を大切に思うのはいいけれど、美樹雄にあたるのはやめなさいといったわよねえ？」

「え、えっと、それはだな…。」

「少しお話ししましょうか…？」

そういつて母さんは父さんの首元を掴むと、ズルズルと俺たちのいるリビングから父さんを引きづりながらでていった。

その途中、父さんが「ドナドナ」を歌ってたのには涙がでてきた…。

「……………」

「……………」

料理が並べられたリビングに取り残された俺と美春。

……………とりあえず、

「飯にするか。」

「そうですね。」

まあ、こんな人たちが俺の家族。

いろいろ大変なこともあります、毎日家族仲良くやっています!!

「……ツま、まっつ美智子さんッ！さすがに鈍器はダメだと思っただ！？」

「ふふふふ。いつもいつも、暴走ばかりして。あの年頃は繊細なんですから。美樹雄たちがぐれてしまっただらどうするんですか……。今日という今日は、その性根を叩き直してあげます。美晴が美樹雄意外の男性に興味を持たないのも、洗濯物が良く乾かないのも、私の化粧ののりが悪いのも、全部あなたが悪いんです……」

「ちょ、ちょま、少なくとも後ろの二つは関係って、ぎゃあああああああああああああああああああ！?!?!?!」

仲……いい……よな……？

プロローグ『俺の家族はこんな家族』（改）（後書き）

どうでしたでしょうか。暇つぶしになれば幸いです。

書き方も少し変えてみたんですが・・やっぱり違和感あるかな。・・

・まあいいか。

ちなみにこの小説は文月学園入学からスタートなので、原作開始まで少し時間がかかります。

…それに就活と、他の連載もあるし。大分遅れるかも…。

それでもいいという人はこれからも生温かい目で見守ってくれたら嬉しいです。

感想に、誤字脱字の指摘、物語の矛盾点など。いろいろお待ちしています。……ただ、あまり激しい悪口なんかはやめてくださいね。自分結構メンタル弱いので…。

それでは、ラドウでした！！

第1話 『文月学園』（前書き）

今回若干の設定ねつ造あります。

ではお楽しみください。

第1話 『文月学園』

サイド：美樹雄（以下ミキオ）

リビングからかわって俺の部屋。

帰ってきた母さんと美春と一緒に朝食を食べ終わった俺（母さんの頬に帰り血のような物がついていたが、見なかったことにした）は、今日の学校に行くために最後の荷物チェックをしていた。

えっと、生徒手帳よし、メモ帳よし、ペンケースよし、財布にハンカチ。ちり紙も持ってる。

制服もさつき鏡で確認したが変なところはなかった。

こんなもんでいいかな…。

ふとベッドのほうを見ると、ある写真楯が俺の視界に入る。

そのシンプルな意匠の写真楯には、美樹雄を小さくしたような少年と、ピンク色の髪をしたふわふわした感じの少女。そして、整った顔立ちだが、どこか抜けている雰囲気少年が笑顔で映っていた。

写真楯に一切埃がかぶっていないことから、美樹雄がその写真楯を何度も手に取っていることがわかる。それもそうだろう。その写真は美樹雄にとって大切な宝物なのだから…。

「あいつら…。今何してんのかねえ…。」

美樹雄がこの二人と一緒にいた期間は小学生の時の二年間だけだった。写真に写っているピンク髪の少女の髪留め。それを、クラスのとある男の子が取り上げたのが原因だった。

その男の子はがたいのいい、子供のころ必ず一人はいたようなガキ大将で、内気で人とうまく話せなかった少女は格好の餌食だったのだろう。すぐに少女に絡んできて、少女が大切そうに持っていたうさぎの髪留めを取り上げたといったところである。

そこに通りかかったのが俺、清水美樹雄だった。

俺は正義感に溢れた性格：とはいわないが、さすがに同い年の女の子がいじめ紛いのことをされてるのを見ているわけにはいかず、そのガキ大将を追い払って、彼女の髪留めを取り返したというわけである。…まあ俺は仮にも人外染みた戦闘能力を誇る清水一家の人間だ。危ないところもあったが、まあ負けるはずがないので傷をつけないように追い払った。耳元で脅しもしいたから先生にチクるところもないだろう。

…まあ、ここまでなら案外普通の話なんだが、ここで終わるわけがないんだなあこれが。

俺は彼女に髪留めを返そうとしたのだが、俺とガキ大将の喧嘩を心配そうに見ていた彼女は緊張が切れてしまったのだろう。急に泣き出してしまったのだ。

そこに通りかかったのがこの写真に写っている、『あいつ』だった。

『あいつ』は泣いている彼女と俺を見るなりいきなり殴りかかってきた。

…いや、確かにこの状況だけ見たら明らかに俺が悪者だが、理由くらい聞こうぜ…。

俺は説得を試みようとしたが、頭に血が上っているようで俺の言葉を全くと言っていいほど聞かず、結局彼女が一生懸命誤解を解いてくれたんだよなあ。まあファーストコンタクトこそ最悪だったが、それが仲良くなって二人と遊ぶようになったんだよなあ…。

でも、父さんの転勤が決まって転校しなくちゃならなくなって。二人とも泣きながらお別れしてくれたっけ…。

この写真はその時に思い出にと、『あいつ』のお姉さんが撮ってくれた写真だ。俺は昔の物は案外あっさり捨てられるがこれだけはどうしても捨てられず今でも大切に持っている。

「本当にどうしてるだろうなあ…。あいつら。」

まあ、『あいつ』は健康に過ごしてるだろうが。「バカ」だし…。

この時、どこかにいる頭の弱い少年がくしゃみをしたのは誰も知らない。

「お兄様あ。そろそろ行きますわよー！」

美春の声に壁に立てかけてある時計を見る。

確かにもういい時間だな。

「わかったー、今行くー!!!」

まあ、父さんが脱サラして喫茶店を開いてくれたおかげでこの町に戻って来れたんだ。運が良ければまた会うこともできるだろう。

そして俺は自分の部屋を出て行った…。

第1話 『文月学園』

【文月学園】

現在、どこの学校にもない、とある最新の《制度》を試験的に導入した進学校であり、俺と美春が今日から通う学校である。

その学校は急勾配の坂の上に、いや山の上にといったほうがいいのだろうか。とにかくそんな所に建っていた。

この坂を登るのは徒歩でも若干辛いものがある。そこまで急な坂だったので、自転車通学の連中はさぞ大変だろうなあ、と少し同情してしまった。

…でも、今はそんなことより大事なことがある。それは…。

「美春、歩きづらい。」

「我慢してくださいませ。」

「…なんでさ。」

今現在、俺の腕に絡みついてくるこいつをどうにかしなくては…。

さっきいったように、この格好は歩きづらい上に人の目が気になっ
てしょうがない。

いくら兄弟だからって、周りの人はそれを知らないわけだし。変な誤解を産むようなことは、避けなければならない。…そう。避けなければならないのだが…

「ふふふ」

…このご機嫌な顔を見ちゃうとなあ。

甘いと思いつながら無理矢理ひきはがさない俺は、結構甘いと思うでも仕方ないよな、たった一人の妹だもんね。父さんが溺愛するのもわかるよなあ。…まあ、あの人の愛情は、大分、いきすぎてるけどね。

まあだから、俺が学校までぐらいなら好きにさせてあげようと思っ
てしまったのも無理はないと思う。

まあ、まだ誰も俺たちのことを知らないわけだし、これくらいなら
大丈夫だろ。

『おい！初日早々女の子と腕を組みながら歩いてるやつがいるぞ！』

『なんてうらやましい…ッ！！その顔覚えたからな、夜道には気を
つけるよゴラア…！！』

『ふふふふ、殺っちゃうよ、殺っちゃうよー。』

『killkillkillkillkillkillkillkillkillkillkillkillkillkillkillkill。』

「美春、頼むから腕を離してくれ、今すぐ。」

「？なんでですか？」

「危ないからな。」

俺の命が。

美春は訳がわからないという顔をしていたが、もう校門の前に来たためか、割と素直に俺を解放してくれたが、俺への殺気は消えることは無かった。

…俺、この学校に来て良かったのだろうか。

なんか入学初日で転校したい気分になってしまった俺であった。

その時俺は気づかなかった。

「……………」

俺のことを見ていた一人の女性の視線を……………。

きんぐくろむぞん…！

現在入学式が終わって、俺たちはそれぞれに振り分けられた教室にいた。

俺と美春のクラスになり美春が暴れだすという事態もあったが、通りすがった筋骨隆々の教師が取り押さえ連れて行った。…暴走状態の美春を取り押さえたの、母さん意外で初めて見たな…。

「しかし、先生おせえなあ。」

教室に生徒はそれなりに集まってるのだが、いまだこのクラスの教師が来ていなかった。

どうやらこのクラスの担任は学年主任の地位についてるらしく（後から確かめたら先程美春を鎮圧した教師だった）、そのせいで先程の入学式に行われた騒動の後処理に追われているようだ。

実は入学式が行われている途中で男子学生二人が突然乱入してきて（俺は人の壁に阻まれて良く見えなかったが）、ちよつとした騒動となったのだ。その場は美春を取り押さえた教師が鎮圧したようだが、そのせいで入学式の間が台無しになったしまい、そのせいで学年主任の出番となったようだ。

先生も災難だなあ。入学式初っ端からこんなことしなくちゃなんないなんて。

そうそう騒動を起こした例の二人だが、入学式の終わった後に気絶から目を覚ましたようなのだが、そのまま生徒指導室に連れて行か

れたようだ。まあ、文月学園の外部の人間もいる場であんな騒動を起こしたんだ。それくらいはしょうがないだろ。

しかし、暇だなあ…。手持ちの本も全部読んじまったし。

ん………。

「寝るか。」

やることもないしなあ。

そうして俺は座っている机に体を預けた…。

「それでは全員そろったな!!」

ハッ!

野太い大声により俺は意識を覚醒させる。

寝ぼけた頭で教室を見回すと全員分の机が埋まっていた。どうやら

ようやく後処理が終わったようだな。

教卓のほうを見ると、美春が暴走した時にお世話になった筋肉質の教師がいた。どうやらあの先生が俺たちの担任らしい。

（まあ、変な先生が担任になるよりいいかな。それに頼りになりそうだしな。）

「事情により予定の時間より遅れたが、これから今後の学園生活についての説明に入る。だがその前にこれからこの教室の面々と君たちは一年間をともにするんだ。まずは自己紹介をしてもらおうか。」
なるほど。確かに何も知らないやつらと一年間を過ごすのはまっぴらごめんだからなま。これは助かる。

「それでは窓側の席から順に自己紹介をしてもらおうか。」

「須川亮です。これからよろしくお願いします。」
あれから特に際立ったなにかがあるわけでもなく、淡々と自己紹介の順番が進んでいく。

確かに助かるとはいったが、……少し退屈だな。

周りを見渡すとこっさり欠伸をしているやつもちらほら。どうやら退屈なのは俺だけではないらしい。

「シマダ ミナミ です。よろしくお願いします。」

俺がそのままボーっと自己紹介を聞いていたら、なにやら違和感のある自己紹介が聞こえてきた。といっても内容のほうではなく、日本語の発音のほうだが。まるで日本語を習いたての外国人みたいな、そんな感じの声だった。

その声の持ち主を見たが、そこにいたのは思い描いたような外国人ではなく、俺が見慣れた日本人の容姿の少女だった。

すらりと長い手足をしていてポニーテールが特徴的なその少女で、間違いなく美少女の域に入るだろう。……一部が残念な感じだが。

キラッ！

おっと、どうやら不快なことを感じとったのか睨まれたしまった。俺は焦らずその少女（島田といったか？）から視線を外す。どうやら島田は感が鋭いらしい。あいつに関しては変なこと考えないようにならなう。……そして美春と接触させないようにしなくては。どう見てもあいつのストライクゾーンだし……。

島田も確信があったわけはないようで、首を傾げながら「よろしくお願いします！」と自己紹介を締め切った。

次に立ったのは、たてがみのような髪をした意思の強そうな男子生

徒だった。野性的な雰囲気がある。

そいつは慥然とした感じで、

「神無月中出身、坂本雄二だ。」。

たった一言だけの自己紹介だったが、周りはそれだけでわかったようだ。周りからささやき声が聞こえてきた。

耳をすませると、『神無月中の悪鬼羅刹』という単語が聞こえてきた。どうやら有名な不良らしく、少し怯えたような感じをしているやつらもちらほら。

(そんなに危ない奴には見えないがねえ。)

だが本人はそんな評価に慣れてるのか、「フン」と鼻を鳴らし席にのそのそと戻ったいった。

そして次の生徒の自己紹介が始まる。

「木下秀吉じゃ、よろしくたのむ。」

その独特な口調に、思わず自己紹介をしていた人物を凝視する。

(え…、あれ…?)

若干混乱してしまっただが、それもしようがないと思う。だって明らかに女性と見間違っ容姿なのに男子生徒の制服を着ているのだから。

(え、あれ？なんであいつ女子の制服じゃないんだ。男子学生って

ことなのかな、名前も秀吉だし…。）

とりあえずこの件については、「男の娘」ということで保留にしよう。

「…今なにやら不本意な理解のされ方をされた気がしたのじゃが。」
気のせいです。

そうして木下の自己紹介が終わり、次に進む。

「……………土屋康太。趣味は盗さ 何もなし。」

……………え？

「……………特技は盗ちよ 特になし。」

そう言う彼のポケットにはカメラやレコーダーが見え隠れしていた。

……………ええッ！！

なんだあいつ、趣味は盗撮、特技は盗聴って。思いつきり犯罪じゃねえかッ！！

なんで誰も突っ込まねえの！？え、突っ込んじゃいけないのかこれ。

木下の存在を知った時以上の衝撃が俺を襲っていた。

…なんだこのクラス、キャラ濃すぎだろが。

俺が頭を悩ませていると、「次、清水美樹雄！」という声がおつと、俺の番か。

なにやら「え…。」という声が聞こえたするが気にしないでちゃったとやっつてしまおう。

ゆっくりと立ち上がり、無難に自己紹介をする。

「清水美樹雄といいます。趣味は読書で、家が喫茶店をやっているのでぜひ来てくださいね?」

ちゃっかり店の宣伝もして、自己紹介を終える。パラパラと社交辞令の拍手が。

それを聞きながら席に座ろうとすると、

ガタタタン!

と慌ただしく立つ音が。

「どうした吉井。」

担任の野太い声が。そうか、今席を立ったのは吉井っていうのか…。

(……………え?)

それは小学生の時に仲良くなった二人の内の一人、『あいつ』と同じ名字。

俺は音がしたほうに首をむけるとそこには、

「ミキオ…？」

八年ぶりにあう幼馴染がいた。

セーラー服で。

第1話 『文月学園』（後書き）

次は清水一家のキャラ設定行きます。

以上、ラドウでした!!

キャラ紹介【清水一家】随時更新あり。(前書き)

連投です。といってもキャラ紹介ですが。

設定ねつ造あります。

ではごきげん。

キャラ紹介【清水一家】随時更新あり。

しみず みきお
清水美樹雄

この作品のオリ主。

キャラが濃すぎる家族（特にブラコンが激しい妹）に悩んでおり、自らは清水家唯一の一般人だと自負しているが、暴走した父親や美春を冷静に鎮圧するその人外染みたその戦闘能力は明らかに一般人ではなく彼が清水家の立派な一員だといえる。

清水美春の双子の兄だが、二卵性のためあまり似ていない。しかしやはり双子なので、どちらかというと女顔であり、木下秀吉と同じく何故かくびれができています。

スポーツなどは友達との遊び意外ではあまりやらないが、日々暴走した父親や、美春を相手に戦闘染みたことを行っており、そのせいで体が引き締まっている。

男の娘ということじゃないが、その引き締まった体と、持ち前の女顔から独特な色気がある。女装すれば色気のある大人の女性に変身するが、一度親戚の忘年会の余興として母親にやらされたがあまりのせきに父親と美春が襲いかかってきたため今は封印している。

実は小学生の時に明久、瑞希と出会っており二年間同じ時を過ごしていたが、当時まだサラリーマンだった父親の転勤のせいで転校してしまった。

全体的に文系科目が得意だが、全力で勉強すれば理数系でもそれなりにいい点数を取れる。

父の喫茶店を手伝ったためそれなりの調理技術を習得しており、かなりうまい。

甘味の中ではゼリーが好物。

しみず みはる
清水美春

オリ主、清水美樹雄の妹。

原作では、ツルペタ好きのレズビアンで、男と見ると誰にでも毒舌を吐くほどの男嫌いだが、この作品では実の兄である美樹雄には女性としての感情を持っている。（やっかいなこと）

明久の姉である玲をも超えるブラコンで、実際兄の寢床に下着姿で忍び込んだり、兄の入浴中に突然乱入したりしている。（その度に兄に追い出されたり、母にお置きされたりしているが）

初めはそれほどでもなかったのだが、あまりにも娘が好きすぎて暴走している父親から自分を守ってくれる兄を見ていたら、兄を男性として見ている自分に気づいた。

一応明久と瑞希とは面識はあるのだが、明久は兄と一緒に時間を邪魔をする敵、瑞希は兄を横取りしようとするライバルとして認識している。

ちなみに父親を鬱陶しがっており、時に面と向かって「豚野郎」などと呼んでいるがさすがに父親だけあり、心のそこから嫌ってるわけではなく、普段は「お父さん」と呼んでいる。

他は原作通り。

ヒロインもどき。

清水美智子

オリ主の母親で、新しく駅前にできた喫茶店『ラ・ペデイス』の看板娘（笑）。

清水一家にしては珍しい常識人で、夫や娘の奇行に日々悩まされている。しかしその実、オリ主と同じで暴走した夫や美春を鎮圧できる数少ない人物であり、そこはやはり清水一家の一員なのだと感じられる。

ショートカットの似合う美人の女性で、20代でも通じる外見をしている。

特技は料理と投擲で、その特技はきっちり美春に受け継がれている。（特に投擲ww）

あまりに暴走する夫に嫌気がさし、美春を連れて「夫の傍にいさせると危険なため」度々実家に帰っているが、それでも夫を愛しているためすぐに元の鞘に戻るといふ行為を繰り返している。（ちなみにこの時夫の手綱を持つのはオリ主の役目である）

清水孝明

オリ主の父親で、新しく駅前にできた喫茶店『ラ・ペデイス』の店主。

元サラリーマンだが、昔から自分の作った料理を食べる人の顔を見るのが好きで脱サラし、その退職金で喫茶店『ラ・ペデイス』を開店した。

孝明がこの町で店を開いたのは、主人公がこの町にいる時が一番楽しそうだったのでこの町にした。

自らの子供を心の底から愛しており、特に美春への溺愛ぶりが度を越しており鬱陶しがられている。

オリ主のことも愛しているが優先順位は美春のほうが上で、美春に懐かれるオリ主を見て、それに八つ当たりをして自らの妻に『オハナシ』されるといふパターンが確立されている。

原作通りに娘を泣かしたり、誑かそうとする物があると暴走し、人外染みた戦闘能力を発揮する。

娘や息子が関わらなければ気のいい中年マスター。

キャラ紹介【清水一家】随時更新あり。(後書き)

設定は随時更新します。

第2話 『再開』(前書き)

あけましておめでとうございませう。ラドウです。今年もよろしくお願ひします！

今回はバカテスの原作メインヒロインが登場です。

それでは今年一発目の投稿です。どうぞー！

第2話 『再開』

唐突だが、皆さんは甘いもので何がお好きだろうか。

饅頭やケーキ。羊羹にクレープなんかもすてがたい。

そんな俺の最近のお気に入りは「ゼリー」である。

ぶるるんとした舌触りに、口に広がる果汁の風味が幸せな気持ちにさせてくれる。個人的にはブドウのゼリーが正義だ。ジャスティス（ちなみにブドウのゼリーは作者も好きで最近ハマっている）

あまりにゼリーが好きすぎて、「虹色ゼリー」なんて物を作って父さんの店のメニューにってしまったほどだ。

…どこから聞きつけたのか、虹色ゼリーを食べに来たト○コとかいうやつ。どっかで見たことあんだけど、どこだったかなあ…。

まあ、なぜ俺がこんな話をしているかというと、

ただの現実逃避である。

「おのれ豚野郎！また美春とお兄様の時間を邪魔する気ですかあ！
今日その息の根を止めてやりますううー！！」

「ちょ、ま。なんでいきなり殺されようとしてんの僕！？」

「とぼけるのもいい加減に下さい。知ってるんですよ！あなたが子供のころからお兄様に気があることをおおー！！」

「ちょっと待って！なにそれ、誤解もいいとこだよッ！？」

「黙りなさい！」

ヒュン！カン！

「危な！って、これ本物！？こんな物あたったら僕死んじゃうよ！」

「ちッ、避けましたか。」

「殺る気満々！？」

…どろしてこっぴなつた。

第2話『再会』

時は入学初日の放課後までさかのぼる。

ちよつとしたアクシデントがあつた自己紹介が無事終わり、先生の学校についての説明も終わつて後は帰るだけという時に、小学生時代の友人。吉井明久が俺の元にやつて来た。

「ひどいよ、ミキオ。なんで他人のふりなんかしたのさ！」

どうやら自己紹介の時に他人のふりをしたのがよほど気に入らなかつたらしい。俺に詰め寄つてきた。

でもなあ、

「そりゃあ、久しぶりにあつた幼馴染がセーラー服着てたら他人のふりもしたくなるわ!!」

お前じゃなかつたら今でも他人のふりを続行してるわ!

「うツ…そ、それは…。」

明久が言葉に詰まる。本人もおかしい事は自覚していたのだろう。

…成長したものだ。（感動）

「で、なんでセーラー服なんて来てるんだ？」

「い、いや違うんだよ？これは中学生の時の制服で。」

「…お前は中学時代を女子の制服で過ごしてたのか？」

だとしたら、この学園ではこいつとは距離をとって過ごさなくては。

「ち、違うよ！？あれは星蘭中学校の。」

…あゝ、なるほどね。

「玲さんの制服を間違えて着てきたのか。」

「！？どうしてわかったの！」

「玲さんが星蘭中だったのは覚えてたからな。（それでも普通間違えるはずないんだが。そこはさすが明久というべきか）」

「…なんか今不愉快なこと考えなかった？」

「気のせいだ。」

ちツ。感がよくなってやがるな。

「しかし、久しぶりだな明久。小学生以来か。」

「なんか誤魔化された気がするけど…。まあそうだね。ミキ才はま

た…女っぽくなつたね…。」

「…いうな。気にしてんだから。」

俺は結構女顔をしている。美春を男っぽく、それでいて少し大人っぽくした感じだ。

このせいで昔は結構からかわれたし、身内には女装させられるし。

……

……

……

……

「あれ？目から汗が。……ぐす。」

「そ、それはそうと！」

俺が涙ぐんでいるのを見て明久はとっさに話題を変えてくれた。

お前は本当にいいやつだなあ、明久。…いまだにセーラー服だけど。

「元気そうだなによりだよ。結構心配してたんだから！」

「そうか、心配してくれたのか。悪かったな。」

こういう友達って、1人いるだけで嬉しいよなあ。

「そうそう、姉さんもミキ君がミキ君がって、ミキオが引越した後は大変だったんだから。」

「そうか、玲さんが…。」

あの人にも世話になったなあ。

美春の世話をしてもらったり、無理矢理一緒にお風呂に入れられたり。

勉強を見てもらったり、無理矢理膝の上に載せられたり。…唇を奪われそうになったり…。

(あれ？今思うと俺、貞操狙われてた…？)

なんか玲さん俺を見る時鼻息荒かった気がするし…。

「ま、まさかな。」

「どしたの？」

「な、なんでもない。」

「？」

き、きつと俺の気のせいだよ。うん、そうに違いない。

あ、そうだ。

「なあ、明久。そういえばあの子はどうした？」

「？あの子って？」

「ほら、俺とお前といつも一緒に、」

俺がいたのはそこまでだった。

…トトトトトト。ガッシャー————ン！

「お兄さま————！美春が迎えに来ましたッよ————！！」

しみずみはるがあらわれた！！

どうやら美春が俺のことを迎えに来たらしい。

そういえば今は放課後なのを忘れていた。どつりで俺たちの他に誰も残っていないわけだ。

美春はそのまま、

「おっについさまー！ー！ー！」

俺にむかって飛びかかってきた。

ガシ！（美春の頭を掴み音）

ガララ（教室の窓を開ける音）

ポイー！（美春を窓の外に放り投げる音）

「あー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！？！」

パンパン（手を払う音）

「ぶづ。．．．．．これよし。」

「いやいやいやいやいやいや!？」

一仕事終えた俺に明久がものすごい勢いで詰め寄ってきた。

「なんだよ明久？」

「「なんだよ明久？」じゃないよ!なに今の?さっきの人は大丈夫なの!？」

ああ、そういうことか。

「大丈夫だよ、いつものことだし。」

「いつもなの!？」

「ていうか、あいつはお前も知ってるはずだぞ?」

「へ?」

「ほら、俺の妹の美春だよ。それにあいつなら大丈夫だぞ?ほら。」

そういつて俺が窓のほうに指をむけると、

「酷いですわお兄様!愛しの妹を放り投げるなんて。」

美春がプンプンと文句をいいながら窓の縁に飛び乗る。…最近通常モードでも身体能力上がってきたなこいつ。

「誰が誰の愛しのだまつたく。」

美春の言葉に俺が呆れていると、美春の視線が明久に止まる。

「……………」

気のせいかその視線に殺気がこもってるような……。

「お兄様、この豚野郎は？」

「ぶたっ!?!」

明久が突然の罵倒に絶句しているが、美春の俺以外の男への態度に今更いろいろいっても仕方ないのでそこはスルー！。

もう大分昔のことだから明久のことを覚えてないのかな？と俺は美春に明久を紹介する。

「ああ、こいつは吉井明久。お前も小学生の時あっただろう？前にこの町にいた時の俺の友達だった……。」

スッパ　　ン！

俺の言葉が終わらないちに発せられた投擲音。

「（がたがたがたがた）。」

ツ—————

えっと、1、2…おい20本以上あんじゃねえか。どっから出した。
明久は冷や汗を流している。

なぜなら美春の殺気が全て自分にむいているからだ。

「え、えっと清水さん？それでなににするつもりなのかな…。」

「なにをするつもりですって？ふふふ。そんなこと決まってるでしょう。それは…。」

「（ゴクリ）そ、それは？」

「お兄様との仲を邪魔するあなたを始末するためです…。」
「…！」

「なんだよそれ…。」

そうして冒頭の状況に戻るといっわけである。

俺がそんなことを考えている間も、美春は明久の命を刈り取ろうと投擲を繰り返す。

シュババババババ！！

「避けるんじゃないやありません、豚野郎！」

「無茶言わないでよ！？」

…そろそろ止めるか。妹に人殺しをさせる訳にはいわないし。(明久の心配はしていない)

シュン！ガシ。

「ふにゃ！？」

俺は美春の後ろに回り込むと、その首根っこを掴んだ。…一瞬で美春の後ろまで移動したのはたぶん作者の気のせいだろう。

「その辺にしておけ美春。やりすぎだ。」

そんな俺の言葉に、しかし美春は不服を唱える。

「は、離してくださいお兄様！この豚野郎だけは、この豚野郎だけは……！！」

美春はジタバタと手足を動かし俺の手から逃れようとする。もがき

ながら殺気のコもった視線を明久にむけているところを見ると話した途端に明久に襲いかかるだろう。

…しかたない。これだけはやりたくなかったのだが…。

俺は美春から手を離した。

「ミキオ!？」

裏切られたような顔をしている明久を無視して、これ幸いとばかりに投擲を再開しようとしている美春を

だきしめた。

「……………へ？」

俺の行動の意味がわからなかったのだろう。明久が間抜けな声をだす。

しかし美春にはこの行動が有効なのだ。現に美春は…

「……………」

俺の行動に完全にフリーズしていた。

こいるは中学生に入ってからいろいろな誘惑もどきを俺にしてくるが、自分が責められるのには弱いようで、俺がこういう行動にでるとよくこんな感じになってしまうのだ。…まあそのおかげで、美春が暴走しただしならよっぽどのがないかぎりこの方法で止められるようになったのはありがたいが。

「あ…、あのー？」

明久がおそるおそるといった感じで話しかけてきた。ああ、そういえばぼつときつぱなしだったな。

「ああ、すまんな明久。妹が迷惑かけた。」

「あ、それは別にいいんだけど。」

いや、お前殺されかけたんだけど…。

明久の視線はフリーズして俺の方に担がれている美春へと注がれていた。どうやら明久は突然フリーズした美春のことを心配しているようだ。

…妹を心配してくれるのはありがたいが、殺されかけた相手を心配する明久のお人よしぶりに心配になったが、昔と変わっていないその性格に少し安心した。

「美春なら大丈夫だぞ？いつものことだし。」

「いつものことなの？」

「いつものことだ。」

明久はいまだ納得していないようだが、そんなことは俺の知ったことではない。

「じゃあ、俺そろそろ帰るわ。：美春が我に返ってまたお前に襲いかかったらめんどくさいしな。」

「そ、そうだね。じゃじゃあ、また明日。」

また襲われてはたまらないと、明久は冷や汗をかきながら別れの挨拶をした。

俺はそんな明久の様子に苦笑しつつ、後ろ手に手を振った。

「また明日。」

と。

そうして俺は美春を担いで教室から出ていった。

あ、あの子の事聞き忘れた。…まあ明日聞きにいけばいいか。

「まったく、なんで邪魔したのですかお兄様！今度こそあの豚野郎の息の根を止められると思ったのに！！」

「いや、それが嫌だから止めたんだが…。」

今俺は正気に戻った美春と学校からの帰り道を歩いている。

あのまま家まで運んでもよかったのだが、それだと誘拐に間違えられる可能性があるため道の途中で正気に戻しておいた。

美春は俺が明久に対する攻撃を辞めさせたのがよほど気に食わなかったのか、ぶんぶんと頬を膨らませている。

…怒っている理由が理由じゃなきゃ、かわいらしいんだがなあ。

美春の期限をどう直そうか考えていると、

ジャリ

ピタ

俺は耳に届いた物音にゆっくりと後ろを振り返る。

「……………」

「?どうしたんですの?」

俺の行動に美春は不思議そうな顔をしている。

俺はそんな美春にとっさに取り繕った笑みをむける。

「あ、ああ。学校にちよつとした忘れ物をしたのを思い出してな？先に帰ってくれるか。」

「はあ…。わかりました…。」

美春は訝しげな顔をしていたが、素直にいうことを聞いてくれた。

美春の姿が完全に見えなくなったの見届けると、俺は先程から俺たちの様子を窺っていた《・・・》人物へと話しかける。

「そこにいるのはわかっている。そろそろでてきたらどうだ。」

校門を出た時からなんとなく感じていたが、先程の足音で確信した。どうやら俺たちは後をつけられていたらしい。

「……………」

観念したのか、物陰から1人の女の子がでてきた。

「君は…!?!」

俺はその姿を見て驚いた。

自分たちをつけていた相手が女の子だからではなく、その人物が、俺が知っている人物とそっくりだったわけである。

さすがに自分が知る彼女より、いろいろ成長している姿であったが間違いない。彼女は…

「瑞希…か?」

そんな俺に彼女、『姫路瑞希』は花開くような笑みを浮かべた。

「はい！お久しぶりです、ミキオ君！！」

くおまけく

キュピ ンツ！！

「はっ！お兄様に悪い虫が近づいた気配！！」

なかなか帰らない兄を心配しながら喫茶店の手伝いをしていた美春は、兄に近づく女性の影を、直感で感じ取っていた。…もはや完璧な人外である。

「急いでお兄様の元へむかわなくてわ！」

そういうと美春は「ラ・ペディス」というロゴのはいったエプロンを放り投げると店の外に出ようとした。しかし、

ムンズ

「ふぎや!？」

またしても美春は首根っこを掴まれた。その時に口からおかしな音が出た気がするが、今はそのようなことは関係ない。

愛しい兄を救出しにいくという（美春視点で）崇高な任務を邪魔する無粋なものは誰かと後ろを振り返るとそこには、

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!

「店を放ってどこに行く気がしら、美春。」

もの凄いオーラを放っている自らの母親、美智子がそこにいた。

「お、お母さん……。」

「なんの用かはわからないけど、無断で店を飛び出していくのは感心しないわね?」

顔は笑っているが、目がまったく笑っていない。これは相当に怒っていることを美春は経験から察した。

「は、離してくださいお母さん。このままではお兄様に悪い虫が!」

「虫？よくわからないけど、そんなわけのわからないことをいう元気があるなら、店の手伝いをもう少し増やしても大丈夫そうね。」

「そ、そんな!？」

美春はまだ文句をいつていたが、美智子はそれを聞き流し、美春の首根っこを掴みながら店の奥へと入って行った。

「お兄様——————!」

美春の断末魔を残して。

ちなみにここら・ペデイスでは、このような光景は割に日常茶飯事であるのは完全に余談である。

第2話 『再開』 (後書き)

ちなみにネタばれするとこの小説のメインヒロインは最後に登場した彼女になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8222z/>

バカとテストと美晴の兄と。

2012年1月3日02時53分発行